

「季節と記憶」

◆ 東南アジアのある国で、数年を過ごした友人が、ふとこんなことを言った。

「四季がないと、記憶が曖昧になるんだよね。」

よくよく話を聞くとなるほど、合点がいった。

年中半袖で過ごすような気候で、日の出・日の入の時間もほぼ変わらないという環境では、日々の時間のつぺりと流れていき、「あの出来事はいつ頃のことだったっけ？」となるらしい。言われてみれば、どの思い出も「季節」がセットになってるかもしれない。

◆ 最後の制服だね、と名残を惜しんだあの桜並木。

海水浴の帰り道、車内に残る潮の香りと子供の寝顔。応援合戦の練習に、声を枯らした夕暮れの放課後。コタツのぬくもりと、祖母がむいたミカンの味。

◆ 天候、草花、食物、服装、行事など。どうやら私たちの記憶は、思いのほか季節と結びついているようだ。

◇ 春・夏・秋・冬——。

四季の彩りを五感で味わうこと。それは色あせない思い出をつくる大事なエッセンスとなるのだろう。

—— 天理のことば ——

しやハセをよきよふにとてじうぶんに

みについてくるこれをたのしめ

(おふでさき 二号 42)

〔解釈〕

人々が皆幸せでよいようにと、親神の方では、十分心を配っているのであるから、心を正しくし親神の意に従う者は幸せを我が身につける事が出来る。それを楽しみに暮らすよう。

陽気ぐらしの天理教

